

佐岡地区中後入における歴史景観の調査 —歴史分析から読み解くムラの暮らし—

楠瀬 慶太^{1*} 大西 悠² 岡崎 廉² 三島 宏太² 渡辺 菊真³

(受領日：2019年5月9日)

¹ 高知工科大学地域連携機構

〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

² 高知工科大学大学院 基盤工学専攻社会システム工学コース

〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

³ 高知工科大学 システム工学群

〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

* E-mail: kusukei31@yahoo.co.jp

要約：本稿は、香美市土佐山田町佐岡地区に位置する大字・中後入を対象に、その歴史的景観を調査・記録したものである。歴史的景観を読み解く手法としては、古文書などの文献の読解という日本史学の方法論と、古老への聞き取り調査という民俗学的手法を複合的に利用している。このような歴史分析によって、ムラの変遷や暮らしを時代ごとに明らかにしている。すなわち、戦国期以前の4集落が江戸期中後入村として統合され、江戸期には長距離用水路の開削により田畑の拡大、戸数の増大が進んだ。明治初期には現在につながる村落景観がほぼ形成され、山林、田畑が広く土地利用されたが、1970年代以降、耕作放棄や植林化、人口減少が進み、現在に至っている。

1. はじめに

高知工科大学の「里山基盤科学技術の社会実装モデルプロジェクト（通称：佐岡プロジェクト）」では、高知県香美市佐岡地区をフィールドに調査研究を進めてきた¹⁾。特に佐岡地区中後入（図1）は、古民家の改修や環境調査、神社の再建など様々な活動が行われ、プロジェクトの拠点となっている地域である²⁾。

これまでの調査研究は、理工系の分野を中心に行われてきたため、中後入集落の歴史的変遷や暮らしについては明らかにされていないことが多い。そこで本稿では、中近世の古文書類や古老からの聞き取りを元に歴史分析を行い、中後入の歴史や民俗誌を記述し、通史的に村落の変遷を追ってみたい。また、古文書類の記載や聞き取り調査のデータについてもできるだけ詳細に記し、今後様々な分野から地

域分析をする際の歴史分野の基礎資料を提示したいと思う。

2. 対象地域の概要

対象地域は高知県香美市土佐山田町佐岡地区の大字・中後入である。佐岡地区は物部川中流域の中では最下流部の右岸に位置する。同地区は本村、佐野^{注1)}、大平、中後入、大後入、西後入、有谷、佐竹の8つの大字から構成されている。

中後入は佐岡地区の中間に位置し、後入川沿いの「西ノ谷」とテンヤ川沿いの「中ノ谷」、有谷川（稲葉谷）沿いの「東ノ谷」の3集落に分かれる。各集落にはそれぞれ3つの川から水路を引いた水田が広がり、かつては石垣積みの中後入景観が広がっていた。特に高知工科大がさまざまなプロジェクトを行っている「西ノ谷」は空き屋が多く、過疎化に伴



図1. 大字・中後入の位置と字界（図はいずれも国土地理院地図から作成）

う人口流出で水田の耕作放棄や植林化が進み、祭礼維持も難しくなっている³⁾。

3. 調査研究の方法

3.1 研究史と問題の所在

中後入については、高知工科大学のプロジェクトを通して、地名（小字）と災害の関係に着目した研究⁴⁾や、屋敷地や神社・墓所などの空間的配置に着目した研究^{5,6)}、航空写真により山林や河川などの1970年代以降の変遷を追った研究⁷⁾、里道の調査⁸⁾などが行われている。これらはいずれも、現代に残っている歴史的な構造物や地図に残る地名などを丹念に調査研究したもので、里山や集落が十分に機能していた時点を復元し、今に至る過疎化や耕作放棄の進行を明らかにしている。

このような現代の資料や情報をもとにした調査研究では、エネルギー革命や高度成長期以後の里山の衰退のプロセスは明らかにできるものの、近代以前に里山がいかに開発されて集落が広がってきたかという発展のプロセスを追うには方法論的限界がある^{注2}。そこで本稿では、近現代以前の文献資料（古文書や記録、地誌など）の精読や古老への聞き取り調査などの歴史的 분석によって、中後入の歴史景観がいかに形成されてきたかを時代順に明らかにしていきたい。

方法論としては、2017年度に佐岡地区本村の歴史景観の調査で用いた総合的歴史分析の手法を利用する。すなわち、歴史文献の残る時代（中世・近世・近代）は日本史学で文献を調査し、古老の証言

が聞ける時代（近現代）は民俗学的手法による聞き取り調査を行い、現代の屋敷や景観は建築学的手法によって現地調査するという複合的研究方法である⁹⁾。特に本稿では、中世・近世・近代・近現代に時代をしばり、日本史学と民俗学の方法論を複合的に用いて分析し、現代の景観の建築学的分析については別稿に記す¹⁰⁾。

3.2 文献調査

まず、日本史学的手法で本村に関する歴史資料や書籍類の収集・整理を行った。歴史資料では、近世初期の土地台帳『長宗我部地検帳』（「山田郷地検帳」）、江戸期の村方文書「佐岡村役場文書」（『土佐山田町史料 第三巻』収録）、地誌『南路志』『土佐州郡志』『皆山集』、明治期の神社記録『高知県神社明細帳』、近代の地誌『高知県香美郡町村誌 佐岡村』、文献では自治体史『土佐山田町史』、佐岡小学校記念誌『大銀杏のもとで』などから、中後入に関する記載を抜き出して、戦国期・江戸期・近代の集落の歴史を検証した。

3.3 聞き取り調査

続いて、文献に書かれた中世～近現代の本村に関する歴史情報を空間的に把握するため、民俗学的手法で住民に聞き取り調査を行った。調査手法は、物部川流域の調査でも使われている住民の暮らしや生活の記憶を民俗誌として記録する九州大学式の調査手法¹¹⁾を採用した。

聞き取り調査の対象は中後入在住または中後入出身の70～80代の古老4人である^{注3}。対象とした年代は、古老の青壮年期すなわち旧佐岡村（佐岡地区）が旧土佐山田町に合併した1954年前後（昭和30～40年代）の集落の状況を中心に聞き取り調査を行った。地名や生業、信仰の他に、屋敷地の性格に着目して屋号や生業などを聞き取り、昭和期の本村の景観や暮らしを復元した。

4. 歴史資料に見る中後入

4.1 中後入の沿革

佐岡は現香美市土佐山田町の大字で、中世には大比良村、西後入村、大後入村、中後入村、一同村、有谷村、秋友村、大屋敷村、河内村、遅越村、佐岡村、佐竹村、佐野村の13力村で構成された。江戸期には、佐岡村、佐野村、大平村、有谷村、佐竹村、後入村の6力村に集約され、佐岡郷と呼ばれた。明治には6力村が香美郡佐岡村となった。村役場が置かれた（江戸期の）佐岡村は、村の中心集落を

あらわす「本村」の名称で呼ばれ、後入村などはその枝村であった。

1954年の町村合併で佐岡村は土佐山田町に編入され、2006年の3町村合併で香美市となる。大字・中後入は「西ノ谷」「中ノ谷」「東ノ谷」の3集落で構成される。有谷川河口東側の3軒ほどを「稲葉」と呼ぶが、「東ノ谷」集落の一部である。集落の中心は、公民館が置かれた「中ノ谷」であるが、「西ノ谷」の大半は「金峯神社」、「中ノ谷」「東ノ谷」は「須賀神社」を氏神として別々に祭っている。

4.2 『地検帳』に見る中世の中後入

中後入について現在確認されている最も古い文献資料は天正17(1589)年に作成された『長宗我部地検帳』『山田郷地検帳』(以下『地検帳』)である。ここでは、戦国末期～近世初期の土佐の各集落を記録した土地台帳『地検帳』から、中世に遡って集落景観や土地支配、開発の様子を復元してみたい。中後入の検地(土地・家屋調査)は、長宗我部氏の役人ら9人によって天正17(1589)年1月13・14日の2日間行われた。検地人は13日に大後入村から中後入村へ入り、一同村、有谷村、秋友村を経て再び中後入村へ入り、大屋敷村、河内村へ向う。14日は秋友村を経て遅越村を検地する。一部、大字・有谷と入り交じる村があるが、現在の大字・中後入の領域は当時、中後入村・大屋敷村・河内村・遅越村の4村で構成されていたと推測される。次に、その検地の結果を記した『地検帳』の地名(ホノギ)や土地利用に関する記述をまとめたのが表1である。虫損により判読できない欠字(□)が多い。土佐の村方では、江戸期や明治期に『地検帳』の写本が作られており¹⁾、今後完全な復元を行うには写本が地域に残されていないかどうか探る必要がある。このため推測の域を出ないが、聞き取りによる地名の現地比定と田畑ヤシキの検地順から、各村の領域を推定してみる。

まず、中後入村の境界(四至)から確認する。北西側の後入村との堺は「サル滝ウ子」、西側の西後入村との堺は「後入川」で、現在の境界とほとんど変わらない北東側では一同村(大字・有谷)と接し、地名が確認できず正確に現地比定できていないが「立コウロ」という場所が堺だったことが記されている。南側は小字「土居ヤシキ」あたりまでが村域だったと推測する。すなわち、中世の中後入村とは現在の「西ノ谷」集落の主な領域を指すと推定される(図2-A)。次に大屋敷村の境界であるが、欠字が多く判然としない。位置関係からテンヤ川の

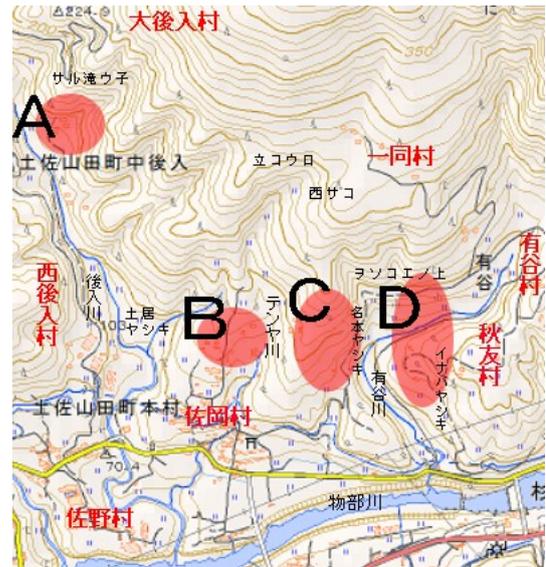


図2. 戦国期中後入村の集落分布

西側、現在の「中ノ谷」集落の領域を指すものと推定される^{注4}(図2-B)。河内村も判然としないが、「名本ヤシキ」などの地名から、テンヤ川の東側、有谷川の西側の領域を指すのではないかと推定される(図2-C)。遅越村は、有谷川西側の小字「ヲソコエノ上」(大字・有谷)と東側の小字「イナバヤシキ」などの周辺にあたる考えられ、現在の「東ノ谷」集落の領域と対岸の「遅越」集落を指すと推定される(図2-D)。屋敷数は中後入村4軒、大屋敷村4軒、河内村5軒、遅越村4軒で経営規模はほぼ同じである。屋敷地には「名本居」「太良二良(太郎二郎)居」「三良四良(三郎四郎)居」などの注記があり、名本(名主層)とその親族が居住していることが分かる。各村における屋敷配置の復元は、欠字が多く難しい。

また、田畑や屋敷は、一筆一筆が給人層(長宗我部家臣団の武士)の給地となっている佐岡村(本村)とは異なり、それぞれ中後入名・大屋敷名・河内名・遅越名の名分となっており、中世の開発領主の系譜を持つ名主(名本)層の一括支配が行われている。続いて、『地検帳』から欠字の少ない中後入村の土地利用や田畑の開発状況を見てみよう(図3)。中後入村すなわち「西ノ谷」では、高標高の山部は畑地と一部の谷田がごく少数見られ、低標高地では「ヲリ坂」から後入川の水を引いた短距離水路で田が作られていたと推定される。図3の元図の1970年代の航空写真のような棚田景観は近世初期の段階では形成されていない。また、畑と畠の書き分けや輪作時の荒れ地の可能性のある「荒」の記述もあるが、一貫性がなく焼畑と常畠を指すものではな

表1. 『地検帳』記載地名の現地比定

村(地検)	ホノギ	地名(読み)	区分	現地 比定	地形 (地検)	備考 (地検・文書)	備考
中後入村	サル滝ウ子	サルダキノウネ	地検帳・小字・口伝	○		大後入塚	「大後入ト中後入芝榜爾サル滝ウ子ワケナコウサノウヘ迄本未限他」『地検帳』、小字「サルダケ」内。
中後入村	ワケナコウサノウヘ	ワケナコウサノウヘ	地検帳	×		大後入塚	
中後入村	菅本松マツ	イッボン	地検帳	×		大後入塚	
中後入村	ナカレ畠	ナガレバタ	地検帳・口伝	○	山畠	山畠内荒	「ナカレ畠中ウ子北ノ谷カケテ横道懸テ」『地検帳』
中後入村	中ウ子	ナカウネ	地検帳・推定	△	山畠	山畠内荒	「ナカレ畠中ウ子北ノ谷カケテ横道懸テ」『地検帳』。「ナカレ畠」との位置関係から、「北ノ谷」(タニゴ)と「東ノ谷」(中ノサコ)の間の畝が「中ウ子」か?
中後入村	北ノ谷	キタノタニ	地検帳・推定	△	山畠	山畠内荒	「西ノ谷」集落の谷「タニゴ」(宮ノ谷)のことか?
中後入村	東ノ谷	ヒガシノタニ	地検帳・推定	△	山畠	山畠内荒	「ナカレ畠同シ東ノ谷ウ子限横カケテ」『地検帳』。「ナカレ畠」との位置関係から、「東ノ谷」は「中ノサコ」(上は「タチバ谷」)か?
中後入村	ヲヲ子ノウ子	オオネノウネ	地検帳・小字	○	山畠	山畠内荒	小字「オフネノ畝」
中後入村	立コウロ	タチコウロ	地検帳	×	山畠	山畠内荒	「□□□一岡立コウロ限他」『地検帳』
中後入村	ヲシウツ西ノ	ヲシウツ	地検帳	△	山畠・田	山畠内荒・下	「ヲシウツ谷川フチ、大屋敷名」※オシウド?
	ヒラ		推定		山畑	下々田・山畑	
中後入村	ミチシハカ谷	ミチシハカタニ	地検帳	△	山畑	下々山畑荒	
中後入村	サルサカタキ川ノ上	サルガタキカウノウエ	地検帳・小字	△	田	下田	※大後入塚「大後入ト中後入榜爾サル滝ウ子ワケナコウサノウヘ迄本松限他」『地検帳』
中後入村	ヲリ坂	ヲリサカ	地検帳・口伝	○	山畑	下々山畑荒	「ヲリ坂二所カケテ谷川西子東ハ中後入名」『地検帳』
中後入村	ホリアケ	ホリアゲ	地検帳	×	ヤシキ	下々ヤシキ	「中後入北ノハシホリアケ」『地検帳』
中後入村	西ノ□□	ニシノ□□	地検帳	×	田	中田・下田・上田	
中後入村	□上東ヤシキ		地検帳	×	ヤシキ	ヤシキ・下々田	
中後入村	上宮ノウシロ	ミヤノウシロ	地検帳・推定	△	田	下田	「同じ上宮ノウシロ道かけて」。宮は金峯神社(座生権現)を指すか?
中後入村	□□ヤシキ		地検帳・推定・小字	×	ヤシキ	ヤシキ	「主居」とある。
大屋敷村	□□ソウ		地検帳	×	田	下田	
大屋敷村	□□コ		地検帳	×	田	下田	
大屋敷村	西ノ□□谷		地検帳	×	田	中田	
大屋敷村	□□ノ上		地検帳	×	山畠	下々山畠	
大屋敷村	□□シキ		地検帳	×	ヤシキ	ヤシキ	
大屋敷村	□□		地検帳	×	山畠	下々山畠荒	
大屋敷村	□□タ		地検帳	×	田	下田	
大屋敷村	□□		地検帳	×	ヤシキ	ヤシキ・下々田	
大屋敷村	□□谷セイ本		地検帳	×	山畑	下々山畑	
大屋敷村	□良二屋敷		地検帳	×	ヤシキ	ヤシキ	「太郎二郎屋敷」か。
大屋敷村	□□シキ		地検帳	×	ヤシキ	ヤシキ	
河内村	向イ田	ムカイダ	地検帳・小字	△	田	下田	有谷の小字「向田」か?
河内村	□□北		地検帳	×	畠	下畠	
河内村	□屋敷		地検帳	×	ヤシキ	ヤシキ・下田・田	
河内村	夫内	フナイ	地検帳	×	田	中田	
河内村	裏屋敷	ウシロヤシキ	地検帳	×	田・ヤシキ	下々田・ヤシキ	
河内村	名本ヤシキ	ナモトヤシキ	地検帳・小字	△	ヤシキ	ヤシキ	小字「名本ヤシキ」か?
河内村	□□□		地検帳	×	ヤシキ	ヤシキ	
河内村	前屋敷	マエヤシキ	地検帳・小字	△	ヤシキ・田・畠	ヤシキ・下田・畠	小字「前ヤシキ」か?
河内村	ウマケタ溝	ウマケタミゾ	地検帳	×	田	下田	
遅越村	□□□□□		地検帳	×	ヤシキ・田	ヤシキ・中田	大字・有谷の内か?
遅越村	西ノサカリ		地検帳	×	ヤシキ・田	ヤシキ・下田	大字・有谷の内か?
遅越村	□□□		地検帳	×	ヤシキ・田	ヤシキ・下々田	大字・有谷の内か?
遅越村	ヲソコノ谷川ヨリ東	ヲソコエ	地検帳・推定	△	田	中田・上田	大字・有谷のヲソコエの向かい。東ノ谷のあたりか?
遅越村	□□□□□畠		地検帳	×	ヤシキ	ヤシキ・下田	
遅越村	□ナハ	イナバ?	地検帳・推定・小字	△	田	下田	「□ナハ同し西」。ヲソコエの向かいだとすると「イナバ」。小字「イナバヤシキ」の周辺か?
遅越村	□□□本		地検帳	×	田	下田・下々田・下々畠荒	
遅越村	ソト谷	ソトダニ	地検帳	×	田	下々田	



図3. 戦国期西ノ谷の土地開発状況（○は水田、△は山畑、☆は神社）

そうだ。いずれにしても田は少なく、畑地に依存した食糧生産が行われていたものと推測される。

4.3 『村役場文書』に見る江戸期の中後入

江戸期の中後入については、江戸前期の史料が非常に少ない。まずは土佐藩が作成した土地台帳などから、後入村全体の様相を概観する。

江戸前期

元禄年間（1688–1704年）に土佐藩が作成した『元禄地払帳』の有谷村と後入村を合わせた本田高（近世初期の長宗我部時代の耕地の収穫高）は253.801石、新田高（山内家時代以降に開発された耕地の収穫高）が710.409石で総石高は964.21石で、江戸前期に新田開発が進み、耕地の収穫高が約3.7倍に拡大したことが分かる。同時期の『元禄郷帳』には後入村の本田高は185.338石と記されていることから、有谷村の耕地の比率は低かったと考えられ、新田開発は後入村で主体的に進められたと推測される。

中後入では、聞き取り調査で水量の多い谷川の水を引いた4つの長距離用水路の存在が確認されている^{注5}。「西ノ谷」「中ノ谷」では後入川の水を引き、本村へと至る長距離用水路「中山井」「ヒコ井」の開削、「東ノ谷」では有谷川の水を引き、本村へ至る「シバ井」「キド井」の開削が新田開発の原動力となり、近代の棚田景観が形成されたと考えられる。しかし、4つの水路の開削に関する伝承はなく、どの水路が江戸期に開削されたものかわからない。

江戸中期

なお江戸中期1740年代の『寛保郷帳』によると、後入村は屋敷数111軒、馬22頭、牛20頭、人口487人の集落であった。『地検帳』段階（1589年）の後入村の戸数が40軒なので屋敷数は約3倍に増えて

いることが分かる。

江戸後期

次に、江戸後期の中後入村の様相を『佐岡村役場文書』（以後『村役場文書』）から探る。『村役場文書』は旧佐岡村役場に所蔵されていた江戸後期（寛政5（1793）年）から町合併時の昭和29（1954）年までの約2500点の古文書群で、うち明治4（1871）年までの約700点が『土佐山田町史料 第三巻』に翻刻されている。このうち中後入村関連の古文書20点【史料1～20】を抽出したのが表2である。以下、古文書からうかがえる江戸後期の中後入村の暮らしを記す。

【土地支配】

年貢を納める期限などを記した文政8（1826）年の「御受合始末」【史料2】によると、佐岡郷には土佐藩主山内家の直轄地「蔵入地」とその家臣の武士層（上士）の領地である「給知（地）」があり、給知についてはその年貢を集める「地租頭」なる役職を住民が担っていたことが分かる。中後入村には、「小倉源十郎」「中山五郎左衛門」の給知があり、それぞれの地租頭を「弥五作」と「甚平」が務めていたことが記されている。「弥五作」は嘉永3（1850）年の「新田永代売渡證文」【史料3】から、中後入村の名本（庄屋）を務めている人物だと分かる。

【江戸後期の名本】

年貢の収集や土地売買、山林伐採などの藩との折衝といったさまざまな村の事務を担ったのが名本（庄屋）である。佐岡郷では、佐岡村（本村）に庄屋・惣老がおり、その管理下で各村に名本がいた。『村役場文書』から江戸後期の中後入村の名本は弥五作一寅之助一治之助一竹蔵と続いた。寅之助は文久2（1862）年には一時佐竹村の名本を兼任、竹蔵も慶応3（1867）年に有谷村の名本を兼任している。

また、元治2（1865）年10月に奉獻された佐岡本村の星神社の狛犬の台座には「中後入村中 世話人名本虎之助 五人組頭惣七 一同百七十二人」とあり¹³、名本の下に五人組頭（惣七）の役職があったことが分かる。

【白米と赤米】

年不詳の「米盛」【史料18】からは、中後入村で「吉（きち）」と「太（たい）」の2種類の米が作られている様子が伺える。「吉」は白米のことを指し、基本湿田で作られる。一方、「太」は赤米で室町期から香美郡内で作られていた乾燥に強い大唐米を指す。【史料19】から水田では主に吉米が作られ^{注6}、水の少なく荒れた切畑で大唐米が作られていたことが分かる。

表2. 『村役場文書』の中後入村関連文書

史料番号	和暦	西暦	月	日	表題	作成・差出	宛名	内容	表記	分類	『町史料』頁数
1	文政4年	1822	5月	11日	奉願	西野彦八	御山奉行所	西野彦八が所有する有谷村の5つの山林の境界などを記した文書。	梅久保山 一山林ヶ所 東 多田半丞改行限 西 中後入境之畝限 南 本田新田限 北 多田半丞知行限」「上ナロ山」「坊主瀬」「原屋敷 一山林ヶ所 東 多田半丞改行限 西 中後入境中後入庄七拓山限 南 中後入庄七拓山限 北 多田半丞知行限」「土屋屋舗上」	所有確認	165頁
2	文政8年	1826	9月		御受合始末	佐岡村庄屋宗藏、同村老岩崎勇藏、同じ達平	御代官所	蔵入地と給知(地)年貢の貢納期限や貢納方法を記した文書。	「小倉源十郎殿地租頭中後入村 弥五作」「中山五郎左衛門殿地租頭中後入村 基平」	財政経済(貢)	2頁
3	嘉永3年	1850	12月		新田永代売渡證文	売主五百蔵丈次郎、受人五百蔵基太夫	中後村権作	銭が入用になったので、五百蔵丈次郎が中後入村の「本田屋敷」まわりの土地1反のうち下畑41代1歩を銭1貫228両3分で同村の権作に売り渡すもの。中後入村名本弥五作の確認署名・印がある。	「ホノキ本田屋敷廻元地巻反ノ内 一地四拾壹代巻歩 中後入村竹銀立敷開 下畑 八代八巻巻貫貳百拾八匁三分」	田地売渡証文	191頁
4	安政5年	1858	12月		指出	佐岡村庄屋柳瀬補丞、同村惣老辰七、同村中後入名本廬之助	御山方御役人所	中後入村「サシカト」に岡村(宅)助が持っている林(茂右衛門が拓いた)から、松30本、浅木を切って、丸太、家道具、ボサにする作業を12月～来年3月にかけて行う願ひ。2月に下山改、御山廻による確認の署名・印がある。	「中後入ホノキサシカト」「地面貳拾代 三方林詰 南井溝詰」	山林	96頁
5	安政6年	1859	6月	7日	得心始末	有谷村百性菊平セ俸無次	佐岡村庄屋柳瀬補丞、同村惣老辰七、同大平村名元東作、同中後入村同席之助、同佐野村同茂藏、同有谷村同竹藏	由喜藏と熊次の喧嘩のことについて。		喧嘩一件	286頁
6	安政6年	1859	11月		指出	佐岡村庄屋柳瀬補丞、同村惣老辰七、同村中後入名本貢之助	御山方御役人所	中後入村「ハサマ」に吉川仲次が拓いた林から、松や浅木を切って、家道具、ボサ(薪)にする作業を11月～来年3月にかけて行う願ひ。12月に下山改、内御山廻による確認の署名・印がある。	「中後入村ホノキハサマ有」「一新田林 壹ヶ所 地面三拾代」「北(東か) 本田限 西南新田林限 北 大後入本田林限」	山林	98頁
7	万延元年	1860	9月		指出	佐岡村庄屋柳瀬補丞、同村惣老辰七、同村中後入名本貢之助	御山方御役人所	中後入村「山神」に鏡藏が拓いた林から、椎や檜、浅木を切って、ボサにする作業を9月～来年3月にかけて行う願ひ。裏書に9月の下山改の署名・印がある。	「中後入村本田新田林ホノキ山神」「一山林ヶ所 本田五代 新田貳代歩」「北 井手限 東西南 作目限」	山林	98～99頁
8	万延元年力	1860	12月		指出	佐岡村庄屋補丞、同村惣老辰七、同中後入村名本貢之助	御山方御役人所	中後入村「松葉上」に岡村宅助が持っている林(早助が拓いた)から、杉15本、浅木を切って、家道具、ボサにし、同村「立葉谷上」にある林(鏡藏が拓く)の松、浅木をボサにする作業を12月～来年8月にかけて行う願ひ。裏書に2月の下山改、御山廻の署名・印がある。	「中御入村岡村宅助領知林ホノキ松葉上有」「一山林ヶ所 東西 新田作目限 北南 領知作目限」「右同前本田買物立ホノキ立葉谷上」「一林ヶ所 地面三拾代 東南 領知林限 西北 本田肥草山限」	山林	100頁
9	万延二年力	1861	1月		指出	佐岡村庄屋補丞、同村惣老辰七、同中後入村名本廬之助	御山方御役人所	中後入村「福葉屋敷」の後ろにある鏡藏が拓いた林から、檜や椎、浅木を切って、ボサ、井道具にする作業を1月～12月にかけて行う願ひ。2月の下山改、御山廻の署名・印がある。	「中後入村ホノキ福葉屋敷後ロニ」「一新田林 壹ヶ所 地面貳拾代」「東 新田林限 南 作目限 西北 谷限」	山林	142頁
10	文久元年力	1861	11月	4日	差出	佐岡村庄屋柳瀬補丞、同村惣老辰七、同中後入村名本廬之助	御山方御役人所	中後入村「坂本屋敷」の後ろにある鏡藏が拓いた林から、松や檜、椎、楊梅、浅木を切って、ボサ(薪)、家道具、井道具にする作業を12月～来年3月にかけて行う願ひ。裏書に9月の下山改の署名・印がある。	「中後入村坂本屋敷後ロニ有」「一新田林 壹ヶ所 地面三拾五代也」「西北東 同林詰 南 畑家園詰」	山林	134頁
11	文久二年	1862	2月		指出	佐岡村庄屋補丞、同村惣老辰七、同中後入村名本貢之助	御山方御役人所	中後入村「立葉道」に庄右衛門が拓いた林から、松2本を切って、角板、家道具にする作業を2月～4月にかけて行う願ひ。4月に下山改、御山廻による確認の署名・印がある。	「中後入村本田林ホノキ立葉道二有」	山林	105頁
12	文久三年	1863	1月		指出	佐岡村庄屋補丞、同村惣老辰七、佐竹村兼勤中後入村名本貢之助	御山方御役人所	中後入村「長刀竹」に万次が拓いた林から、杉36本、松6本、浅木を切る作業を1月～12月にかけて行う願ひ。裏書に1月に御山廻による確認の署名・印がある。	「中後入村長刀竹二有」「一本田林 壹ヶ所 地面壹反拾代」「四方本田詰」	山林	106～107頁
13	文久三年	1863	8月		指出	佐岡村庄屋補丞、同村惣老辰七、中後入村名本貢之助	御山方御役人所	中後入村「槐葉屋敷」に鏡藏が拓いた新田にある杉1本を切って、板にする作業を8月～9月にかけて行う願ひ。裏書に8月の御山廻弥平の署名・印がある。	「中後入村槐葉屋敷新田御買物ノ内」	山林	106頁
14	慶応元年	1865	9月		土免定	深尾直衛 御代官	同村庄屋老百性中	西後入村、中後入村、佐野村の新田、屋敷、畑の年貢を土免により定めたもの		財政経済(土)	27頁
15	慶応2年	1866	11月	24日	差出(銀右衛門御買物難洗二付附立帳)	名本作之丞、惣組頭安右衛門	庄屋笹右衛門、惣老辰七	中後入村の銀右衛門(鏡藏)が買物未進のため、未進の銭・米の詳細および「中後入 丈右衛門」ほか未進先の人物を列記し、借物とする居宅および家財道具を書きだしたもの	「中 銭壹貫六十匁也 中後入 丈右衛門」「一 銭四拾匁也 中後入ノ 首次」	財政経済(買物)	5～7頁
16	慶応2年	1866	12月		被召置始末	銀藏、銀藏親族本村専次、中後入村庄左衛門、同村席平、佐竹村吉藏、垂生郷白川村組頭礼平	佐岡村庄屋笹右衛門、同村惣老清七、同中後入村名本治之助	買物未進の理由は銀藏(銀右衛門)の家族の病であり、未進分は地下役所が立会って居宅・家財道具を売り払って銭に変えて未進者へ治めるようになった旨を銀藏が庄屋に報告したものの、もしも場合は親族が世話をする旨の文書が添え書きされている。		財政経済(買物)	7頁
17	慶応3年	1867	12月		田地百性役共永代譲り渡證文	地譲り主中後入村久吾右衛門、請人犬後入村伊勢次	犬後入村助八	犬後入村「小ヤスバ」の田地を、中後入村・久吾右衛門が病氣のため年貢未進となり、百性役とともに土地を犬後入村助八に礼銭壹貫九百匁で譲り渡すもの。		田地売渡証文	181頁
18	慶応3年	1867	12月		新田永代売渡證文	田地売主佐岡村悦作 證請人同村初藏	才岡村仲平殿	佐岡村の悦作が年貢未進のため、中後入村の「ハサマ道」の新田・下々畑2反のうち1反を八錢五百目で才岡村の仲平に売り渡すもの。同日付で中後入村兼有谷村名本の竹藏の確認の署名・印がある。	「中後入村兼有谷村名本竹藏」	田地売渡証文	212頁
19	年不詳				米盛			佐岡郷各村の蔵入地、給地の年貢高を石高で記した文書。	「中後入 村上 一地貳斗五升 △物成四升四合 太 畑」「同村 孫右衛門 一地三斗貳升 △物成八升三合 田 吉 外三斗五升貳合」「同村惣堀 一地三拾五石三斗三升九合 △物成七石六斗九升三合 内五石七斗四升三合 田 壹石九斗五升 屋敷 畑 内五石七斗四升 吉 壹石九斗五升三合 太」	財政経済(米盛)	31～36頁
20	年不詳		11月		指出	廬之助		中後入村「福葉屋敷」の後ろにある林(五百蔵惣平拓)にある松、浅木を切って、ボサ、家道具にする作業を来年8月までに行う願ひ。宛名がなく案文または写しか。	「中後入村福葉屋敷後ロニ有」「一新田林 壹ヶ所 地面參拾代計」「西東 同林詰 南 屋敷 式詰 北 道詰」	山林	152頁



図4. 江戸後期中の後入村の山林分布

【山林の所在地とボサ】

江戸時代、村内にある私有林、藩有林の切り出しにはその都度、藩の役所に願いが必要だった。『村役場文書』にも材木切り出しに関する文書が数多く残されている。

材木の種類は、杉、松、檜、椎、楊梅が記されており、丸太や板、角材、家道具（タンスなどの家具類か）、水路の補修道具、薪などに加工されている。

文書記載の地名から中後入村の「林」の所在を記したのが図4である^{注7}。「立葉谷」のような高標高地だけでなく、「稲葉屋敷」「坂本屋敷」など屋敷の後ろにも林があり、「拓（ひらく）」の表記があることから、住民が植林や間伐をして木の生育や管理をしていたことが推測される。伐採した木の使用用途は、家道具やボサ（薪）が多く、森林の少ない中後入では、村外への材木の搬出はほとんどなく、村内での使用が主体を占めていたようだ。その要因として、中後入には西後入や佐野のように藩有林（御留（おとめ）山）がなく、私有林が中心の草山で搬出するような大きな材がなかったことがあげられる。森林が少ない地域であることから、屋敷地や社地（山神）の一角にも住民が木を植えて、建材や薪材に充てていたことが伺える。

【肥草山・家畑】

万延元（1860）年に年次比定される「指出」【史料8】には、立葉谷の林の境界が「一林壺ヶ所 東南領知林限 西北 本田肥草山限」と記されている。

立葉谷の西北にあった「肥草山」（図4）とは、田んぼの肥料や牛の餌にする草（カヤカ）を採る山。「本田肥草山」の記載から『地検帳』以前の中世からあった草山であることが伺える。

【東ノ谷の屋敷】

聞き取り調査で、黒岩隆清氏が東ノ谷の稲葉屋敷について、「昔は田んぼで今は畑地になっている。昔は家があったらしい。『稲葉屋敷』の田んぼのふちに2つ笠のある江戸時代の墓がある。田中という苗字が書かれているが、そんなもんは東ノ谷にはおらん。また今は東ノ谷に五百蔵姓のものはいないが、五百蔵氏の先祖八幡がある。昔は五百蔵姓もいたのではないかと話している。

年不詳の「指出」【史料20】からは「稲葉屋敷」の存在が確認でき、嘉永3（1850）年の「新田永代売渡証文」【史料3】から、中後入村に五百蔵姓の存在を確認できる。今西喜久氏からの聞き取りによると、昭和期の西ノ谷もほとんどが五百蔵姓であった。今西姓も戦時中の徴兵回避のための名字変更で、もとは五百蔵姓であったという。

他にも「本田屋敷」【史料3】、「坂本屋敷」【史料10】、「槐葉屋敷」【史料13】があり、屋敷が屋号で呼ばれていたことが確認できる。

【銀蔵の家財道具】

幕末の慶応2（1866）年の「差出」【史料15】、「被召置始末」【史料16】は、百姓の銀蔵（銀右衛門）が借りた銭（計15貫370匁5分）を返せないため、居宅および家財道具を売って弁済する旨を記したものである。【史料15】の家財道具の目録には、水たこ・たらい・酒桶・米桶・鉄はし・竹はし・茶たんす・德利・肥たご・掛柄杓・たまり・草刈鎌・摺糖・長持・唐箕・鍬・湯茶釜・ツキ白・丁斧・柄鎌・馬鍬・皿鉢・もの居・鉄矢が記されていて、当時の百姓の暮らしの様子が伺える。

また、【史料16】では、銀蔵が借金を未払になったのは家族が病気であることが理由であること。また、銀蔵の親族（5人）が借財の件について詫言を入れ、足りない場合は弁済し、銀蔵の家族が路頭に迷わないよう世話をする旨が記されている。親族の一人には2つ隣の白川村組頭（礼平）もおり、よそさまに迷惑をかけないように村を越えて親族間で相互扶助したことが伺える。

4.4 『神社明細帳』に見る明治期中の後入

佐岡郷の人口や産業など明治初期の様相を知る史料として『高知県香美郡町村誌 佐岡村』があるが、各村の様相は分からない。そこで、明治12（1879）年に内務省布達により高知県が県内神社を調べた『高知県神社明細帳』（以下『神社明細帳』）から、近現代の中後入の神社や信仰の様相を探る（図5）。



図 5. 近現代中後入の神社分布

【座生権現】

まず、西ノ谷(字宮ノ谷)の氏神・座生権現については『神社明細帳』に「中後入西組部落ノ産土神ナリ元座生権現ト称ス明治元年辰三月改称ノ達ニヨリ金峯神社ト改称ス」とあるように明治元(1868)年に金峯神社へと名称が変わる。「寛永元甲申年十一月ノ棟札アリ」とあり、棟札から江戸初期の1624年に神社の存在が確認されることから、神社は中世からすでに存在したと推測できる。

神体は鏡(現在は岩)、祭日は7月23日、10月23日。一方、1815年編纂の『南路志』には「座生権現 中後入 祭日正六九月十五日」とあり、江戸期とでは祭礼日が変わっている。今西氏への聞き取りでは、相撲場の跡があり、神社には御輿はないが神輿の担ぎ棒があったという。どの時期か分からないが、相撲やお神輿の神事が行われていた可能性はある。

また、「氏子十一戸」とあり、西ノ谷には当時11軒の家屋があったことが分かる。社殿は「本殿桁行一尺四寸梁間一尺五寸粉葺」「拝殿桁行二間一尺梁間一間三尺葺」「木造鳥居一基」とあり、神社の本殿は粉(そぎ)葺、拝殿は茅葺だったようだ。

【山神】

字フロゾ谷にある「山神」は「中後入部落ノ崇敬神ナリ元ト山神ト称ス明治元年辰三月改称ノ達ニヨリ山祇神社ト改称ス」とあり、山祇神社に改称された。「明和七年庚寅トシ正月ノ棟札アリ」とあるように1770年には神社が祭られていた。また、「祭日十二月廿八日」「本殿桁行一尺三寸梁間一尺五寸粉葺」「拝殿桁行三尺梁間三尺五寸葺」「木造鳥居

一基」とある。「信徒30人」と記されているが、中後入村全体が信徒なので30戸であろう。

【祇園牛頭天王】

字ミヤカゲにある「祇園牛頭天王」は、「中後入中組部落ノ産土神ナリ元祇園牛頭天王ト称ス明治元年辰三月改称ノ達ニヨリ須賀神社ト改称ス」とあり、須賀神社に改称されている。「ホノキ上三ノ宮牛頭天王」とも記されており、過去には「上三ノ宮」とも呼ばれていたようだ。「享保十九年甲寅十一月ノ棟札アリ」「神体鏡」「祭日七月廿八日 十月廿四日」「本殿桁行一尺八寸梁間二尺粉葺」「拝殿桁行三間梁間式間瓦葺但内桁行三尺梁間一間幣殿」「木造鳥居一基」「氏子十九戸」などの記述もある。1815年の『南路志』には「牛頭天王 中後入上ノミヤ 正体鏡 祭日正六九月十五日」とあり、江戸期と明治期では祭礼日が変化している。

『神社明細帳』の記述から、氏神は西組・中組で異なっているものの、その中間にある山神の祭りを通して中後入村の宗教的つながりが維持されていたことが伺える。また、1870年頃の中後入村の戸数は30戸であったことが分かる。戦国末期(1569年)の『地検帳』段階の中後村の戸数は17軒であり、300年で13軒家屋が増えた計算にある。

【その他の神社】

3つの神社の他に、聞き取り調査から中後入の人たちが信仰している神社を以下に列記する。

山神 大後入分。年1回、3~4人の婦人でお参りに行っている。大きな岩の下に瓦製の祠がある。

目の神様 西ノ谷集落の谷東側に、瓦の祠があった(今はトタンの祠)。神体がないので後にガラスの水晶玉をこしらえてまつている。五百蔵先祖神社の祭礼と同じ日にお祭りをしている。

どんど 中ノ谷集落の奥にある木製の社殿。横山家先祖の横山弥助が背中におうてきたとされる神様。佐野と中ノ谷の横山家2軒で年1回祭る。

五百蔵先祖八幡・黒岩先祖八幡 それぞれ東ノ谷にあり、五百蔵、黒岩家が集まりお祭りする^{注8}。

5. 民俗資料に見る中後入

ここでは近現代の中後入村の景観や暮らしを、聞き取りや屋号などの民俗資料から読み解く。聞き取りの資料については、位置や詳細を表3にまとめたので参照願いたい。

5.1 屋号資料に見る近現代の中後入

まず、近現代の集落において使われた家の呼び名「屋号」について分析する。

表 3. 聞き取り調査で収集した中後入の民俗資料

NAME	読み	X	Y	種別	分類	大字	出典・根拠	内容
オリサカ	オリサカ	33.645442	133.718145	池名	土地・生業	中後入	地検帳・口伝	「ヲリ坂二所カケテ谷川西子東ハ中後入名」「下々畑荒」『地検帳』。後入川から水路を引き入れている所
ヒコ井	ヒココ	33.646667	133.717239	水路	土地・生業	中後入	口伝	中後入と大後入の堺付近の取水口のある用水路。座標は取水口。
サンカド	サンカド	33.646935	133.71858	田	土地・生業	中後入	口伝・村役場文書	タニゴ東側の田。1反30枚くらいある段々の棚田で、麦を植えたことがある。サンカドは急な棚田で牛が滑落したこともあった。その上に炭窯があった。
オモヤ	オモヤ	33.646975	133.71806	屋号	集落	中後入	口伝	西ノ谷の屋号、五百蔵姓
ウエ	ウエ	33.646711	133.718371	屋号	集落	中後入	口伝	西ノ谷の屋号、五百蔵姓
インキョ	インキョ	33.646566	133.718433	屋号	集落	中後入	口伝	西ノ谷の屋号、今西姓
シタ	シタ	33.646481	133.718235	屋号	集落	中後入	口伝	西ノ谷の屋号、五百蔵姓
シタク	シタク	33.646349	133.718399	屋号	集落	中後入	口伝	西ノ谷の屋号、五百蔵姓
タニゴ	タニゴ	33.6469	133.718879	谷	土地・生業	中後入	口伝・地検帳	『地検帳』などにある「宮ノ谷」か。金峯神社東側の谷。タニゴは地元の通称
目の神様	メノカミサマ	33.646655	133.718743	小社	信仰	中後入	口伝	タニゴの東側に、瓦の祠があった。
金峯神社	カナミネジ ンジャ	33.647172	133.718681	神社	信仰	中後入	南路志・神社 明細帳	「字宮ノ谷」「中後入西組部落ノ産主神ナリ元座生権現ト称ス明治元辰三月改称ノ達ニヨリ金峯神社ト改称ス」『神社明細帳』
流シバタ	ナガラバタ	33.645318	133.719503	畑	土地・生業	中後入	地検帳・口伝	「ナカレ畠中ウ子北ノ谷カケテ横道懸テ」『地検帳』
中ノサコ	ナカノサコ	33.645492	133.720184	谷	土地・生業	中後入	小字・口伝	谷の上の方は「タニバダニ」と呼ぶ
マエ	マエ	33.645021	133.7185	屋号	集落	中後入	口伝	西後入・御子ノ谷から降りてきた?
ウシロ	ウシロ	33.644847	133.718562	屋号	集落	中後入	口伝	「字ミフロヂ谷鎮座」中後入西組部落ノ崇敬神ナリ元ト山神ト称ス明治元辰三月改称ノ達ニヨリ山祇神社ト改称ス」『神社明細帳』
トドロ	トドロ	33.644767	133.718963	屋号	集落	中後入	小字・口伝	西ノ谷の屋号。昭和30年代、西ノ谷唯一のワラ葺き屋根。蔵はなかった
タノキア	タノキア	33.645238	133.719218	池名	土地・生業	中後入	口伝	中ノ谷と西ノ谷をつなぐ「ヒコ井」沿いの道にある池名。「田のきわ」という意味か。
ヤマノカミ	ヤマノカミ	33.642307	133.721064	屋号	集落	中後入	口伝	裏に大きな木があって山ノ神がある
山ノ神	ヤマノカミ	33.642532	133.721087	小社	信仰	中後入	南路志・神社 明細帳	「字ミフロヂ谷鎮座」中後入西組部落ノ崇敬神ナリ元ト山神ト称ス明治元辰三月改称ノ達ニヨリ山祇神社ト改称ス」『神社明細帳』。楠自家の裏、中ノ谷と東ノ谷の人がまつている。
フロガ谷	フロガタニ	33.642487	133.72211	谷	土地・生業	中後入	口伝・神社明 細帳・小字	「字フロヂ谷鎮座 山祇神社」『神社明細帳』
木橋	キバシ	33.64472	133.718335	橋	土地・生業	中後入	住宅地図・口 伝	昭和30年代、今後入川にかかる橋(マエの下)は、木橋だった。大水で流れたり、破損すると中後入が修理をしていた。
フチンボ	フチンボ	33.644833	133.718295	淵	土地・生業	中後入	口伝	橋のすぐ上流に深い淵があって、西ノ谷の子供が川遊びや魚取りをした。ドボンと飛び込めるほど深くない。ウナギ、ハエ(ハヤ)、モツゴ、ゴリ、ツガニが獲れた
長淵	ナガブチ	33.642469	133.719867	淵	土地・生業	中後入	口伝	岩場があって中ノ谷の子供たちが泳いだ。海老もすくった。小さい淵で、大きくなると大川(物部川)で泳いだ。
軍人墓地	グンジンボ チ	33.6415	133.722576	墓	信仰	中後入	口伝	昭和14年9月に中国戦線(日中戦争)で戦死した横山忠男の墓。戦死後、地区の人が「ヨコムネ」の山から石を掘り出し、キンマを使ってイチドウへ行く道(西又道)を下ろしてきた。その石を積み上げて軍人墓を住民が造った(昭和16年に完成)。当時の写真もある。墓の石材は土佐山田東町の中村石材で造ってもらい、馬で引っ張ってきた。
横山家先祖墓	ヨコヤマケ センゾバカ	33.641754	133.72263	墓	信仰	中後入	口伝	横山家の庭に先祖の名前が書かれた墓石が複数ある。最も古い先祖・横山弥助の墓もある。
どんど	ドンド	33.641817	133.722995	小社	信仰	中後入	口伝	横山家先祖の横山弥助がおうてきたとされる神様。
イザ屋敷	イザヤシキ	33.641763	133.722222	屋号	集落	中後入	口伝	竹内家。
寄合場	ヨリアイバ	33.641736	133.722469	屋号	集落	中後入	口伝	中後入の寄合場。
前屋敷	マエヤシキ	33.641553	133.722818	屋号	集落	中後入	口伝	曾我部家。
コウチ谷	コウチダニ	33.641509	133.723472	屋号	集落	中後入	口伝・小字	五百蔵家。
テング川	テングガワ	33.641205	133.723537	川	土地・生業	中後入	口伝	
サカモト	サカモト	33.642063	133.724572	屋号	集落	中後入	口伝・村役場 文書・小字	黒岩家3軒を合わせて呼ぶ呼称。
須賀神社	スガジンジ ヤ	33.641013	133.723601	神社	信仰	中後入	神社明細帳・ 南路志	昔は年4回祭、今は2回、中ノ谷と東ノ谷の氏神。「牛頭天王 中後入上ノミヤ 正体鏡 祭日正六九月十五日」『南路志』
稲葉谷	イナバダニ	33.641808	133.726702	谷	土地・生業	中後入	口伝	谷の下の方は「稲葉谷」「有谷川」、上の方は「稲葉の川」ともいう。
ハエクビ屋敷	ハエクビヤ シキ	33.640816	133.727791	田	土地・生業	中後入	口伝・小字	田んぼになっている。ハエクビ屋敷には家が昔はあった。
稲葉屋敷	イナバヤシ キ	33.641111	133.728295	田	土地・生業	中後入	口伝・村役場 文書・小字	昔は田んぼで今は畑地。昔は家があったらしい。稲葉焼の田んぼのふちに2つの笠のある江戸時代の墓がある。田中という苗字が書かれている。
五百蔵先祖八幡	イオロイセ ンゾハチマ ン	33.640559	133.72834	小社	信仰	中後入	住宅地図・口 伝	東ノ谷の集落の下にほこらがある。旧暦8月15日に中後入(出身)の五百蔵姓が集まる。
黒岩家先祖八幡	クロイワセ ンゾハチマ ン	33.64127	133.727793	小社	信仰	中後入	口伝	黒岩家は安芸国虎の家臣・黒岩越前が先祖らしく昔は毎年安芸のお墓のお参りにもっていた。もと一条家に嫁いできた人に付いてきた従者で、中村から安芸に行った。長宗我部改易後は大橋へ逃げて行って増えたと聞いている。
向田	ムカイダ	33.641576	133.728016	田	土地・生業	有谷	口伝・地検帳	今は杉林になっているが、昔は田んぼ。
キド	キド	33.641875	133.728134	池名	土地・生業	有谷	口伝	昔は田んぼ。
キド井	キドク	33.641978	133.727501	水路	土地・生業	有谷	口伝	有谷川から取水。シバ井は今使っていない。
シバ井	シバク	33.642357	133.72866	水路	土地・生業	有谷	口伝	有谷川から取水。
稲葉	イナバ	33.638999	133.728386	小集落	集落	有谷	口伝	有谷川の河口西側の集落名。3軒を合わせて稲葉と言った。
辻越	オソゴイ	33.642339	133.727265	池名	土地・生業	有谷	口伝・地検帳	川向かいの山・畑・雑木(ボサ)など取りにいった。



図6. 中後入・本村の屋号

武士をのぞく農工商身分の多くが「姓」(苗字)を持たなかった前近代では、社会生活の中で「家」の呼び名が必須となった。屋号は、本来家屋敷を示すのに使われる呼称であり、「姓」の他に他家を区別するために用いる「家称」であった。現在では血縁関係は「姓」で呼び分けるが、前近代社会では屋号が「姓」の変わりとして使われたと考えられている。このため、屋号が使われた社会では「姓」は集落外への公称となり、屋号は集落内での「姓」の変わりとなる呼び名として使われ、集落内で通用するものだった^{注9}。このような背景から歴史的な性格を持つものと屋号資料を位置づけ、考察を行う。

2017年以降、佐岡地区で行った聞き取り調査で収集した屋号は以下の37個である(図6)。屋号は昭和期までは使われていたようだが、現在はほとんど使われていない。

- 大後入^{注10} (「ヒャクダ」「シンヤ」「ミヨウトイワ」「谷屋敷」「土居」「土居ノ前」「オモヤ」「ミネ屋敷」)
- 西後入^{注11} (「森田」)
- 中後入 (「オモヤ」「上」「下」「インキョ」「新宅」「前」「後」「トドロ」「山神」「イザ屋敷」「コウチ谷」「寄合場」「前屋敷」「稲葉屋敷」「ハエクビ屋敷」「稲葉」)
- 有谷^{注12} (「サゴノイシ」「ムカイ」「オドリバ」「スズハラ」)
- 本村 (「コヤシキ(古屋敷)」「花月」「カジヤ」「原酒店」「沖土居」「カジヤ」「寺屋敷」「カジヤ」)

聞き取り調査から集落によって屋号の呼び方・使い方が微妙に違っていることが分かった。大後入および中後入・西ノ谷では一軒一軒に屋号があるのに対し、中後入・中ノ谷では屋号のない家もある。

また、中ノ谷の「坂本」、中後入・東ノ谷の「稲葉」、有谷の「スズハラ」「ムカイ」「オドリバ」のように2~3軒の複数の家(屋敷地)を屋号のように呼ぶ集落がある。本村には「カジヤ」「花月」(魚屋)のように職業・商家屋号を持つ家があり、屋号のない家がほとんどとなっている。また、東ノ谷では昔家のあった場所を「稲葉屋敷」「ハエクビ屋敷」と呼んでいた。

このように見ると、西ノ谷・大後入は各家に方位・方角や地名由来の屋号を多く持ち、旧物部町の山村屋号と類似した性格を持っている。一方、職業・商家屋号が中心となっている本村は、戦国期以降に形成された町場的な性格の名残が屋号に投影されると推測される。複数の家で屋号を呼ぶ中ノ谷・東ノ谷・有谷は、上記とはまた異なる性格を持っていると思われるが、その理由はよく分からない。

また、聞き取り調査から西ノ谷の集落変遷を屋号から分析すると、「オモヤ」→「上」→「インキョ」→「下」→「新宅」と家屋が作られたようである。年代は分からないが、五百蔵姓の親族間で本家・分家が分かれる形で上から下へ家屋が増築されていったと考えられる。物部川沿いの小谷沿いに展開する集落の家屋変遷のモデルとして重要な事例である。なお高知工科大学により古民家改修などが行われている家の屋号は「下」である。

次に、屋号がどの時代までさかのぼれるのか文献資料から探ってみると、戦国末期の『地検帳』に「(太良)二良屋敷」「後屋敷」「名本屋敷」「前屋敷」が登場するが、いずれも位置関係から現在の屋号と一致するものは確認できない。江戸初期の『村役場文書』に登場する「稲葉屋敷」「坂本屋敷」は現在の「稲葉屋敷」「坂本」に比定できるが、「本田屋敷」「槐葉屋敷」は屋号・地名とも残っておらず比定できてないが、江戸後期にそのような屋号があったことは間違いない。中後入の明治初期の家数が30戸で、戦後が28戸、ほとんど近現代に家の数は変わっていない。大きな集落の変化がなかったとすれば、現在のような屋号の成立が江戸期までさかのぼれる可能性はあるが、判然としない。

5.2 中後入の民俗誌

次に昭和後期(1950~80年代)を中心にした昭和期の「中後入」集落の様子を明らかにする。古老への聞き取り調査の内容を「西ノ谷」「中ノ谷」「東ノ谷」の3集落についてそれぞれ、昭和期の暮らしの記憶を民俗誌的に紹介する。

【西ノ谷】

屋根 中後入の家の屋根は昭和10年代から瓦葺き。屋号「トドロ」がワラ葺きだった。蔵はほとんどの家にあったが、屋号「山ノ神」「トドロ」「インキョ」にはなかった。1階は米蔵、2階に布団や長持ち類を置いていた。

田畑 中後入は田が少ない。佐野や本村、山田の八王子にも田を持っていて、加地子（田を貸した人からもらえる米）でやっていけた。田んぼの二毛作は昭和30年代くらいまでやっていて、田の後に麦を植えた。西ノ谷の後入川の向かいにある田「ヒラキ」や「サンカド」と呼ばれる棚田で麦を作った。田んぼの畔には、大豆を植えていた。蚕を飼っている家も多く桑畑はたくさんあった。キビ（トウモロコシ）は家の小さな畑で作るくらいだった。

カジ 楮とも。紙の原料。田んぼの畔にカジが植わっていた。切り出して束にしたカジは水路につけて置いておき、本村の星神社西側のカジの収集場に売りに行っていた。子どもの時は、皮をむいて白皮になったカジがたくさんあって、「おんちゃんくれ」いうたらカジの木をくれて刀にして遊んだ。

山の利用 各家で赤牛を飼っていた。牛の餌は田んぼの畔の草を切って与えていた。草山などの共有林はなかった。各所に雑木林があり、タキモン（薪）は各自の山から取っていた。終戦ごろには炭窯がたくさんあって何軒かが炭焼きをやっていた。

植林 中後入は大々的に木を植えなかったが、昭和40年代から徐々に田んぼや畑にスギ、ヒノキを植えていった。上の方から植えたのではなく、一斉に植えた。

物部川工事のドカタ 農業だけでなく、現金収入を得るために男たちは県外（徳島等）に土木作業にいたりしていた。女性も物部川の工事の「ドカタ（土方）」作業に行き、川岸のブロックを積んだ。

猟銃 猟銃はどこの家にもあって、鳥を捕って皮をむいて食べた。猪や鹿を捕ることはなかった。

飲み水 今古民家の改修をしている「下」の近くにわき水があってその水を飲み水として使っていた。「上」の家近くには横井戸（今も跡がある）があって、谷川の水をひいて使っていた。

中後入の里道 主な里道は三カ所で、後入川沿いの下の道（「木橋」を渡って西後入を経由して本村へ向かう。店や診療所があるので本村へはよく行った）、中の道（あまり通らない）、水路「ヒコ井」沿いの上の道（谷をいくつも渡る。中ノ谷へ行く道。回覧板を持っていく時も使った）があった。それぞれの道の最終点は金峯神社の横を通る道で大後入へ向かう山道へつながる。山道はかなり険しく、大後

入の人たちは古民家の塀そばにある階段に座って休む。西ノ谷の人が「おーい」と声をかけて、しゃべったりした。中後入の人が道を使って大後入へ上がることは少なかった。昭和30年頃、車を持っている人はおらず、原動機付バイクを持っている人が何人か。あとは徒歩で移動していた。

行商 魚屋が行商で週1回赤岡から自転車に乗ってきていた。中後入を経由して大後入に行った。生で食べる魚、煮る魚、焼いて食べる魚と分けて買っていた。ナイラゲはよく買った。大後入にも魚屋（溝淵さん）があって何度か買いにいった。豆腐も作っていた。富山の薬屋も大きな荷物背負ってきていた。

後入川での川漁 後入川で獲った魚は、ウナギ、ハエ（ハヤ）、モツゴ、ゴリ、ツガニ。ウナギは、竹ひごにカンタロウミズを指して穴に入れて、構えて出てきた所を手袋をして押さえた。ゴリは、空き缶をいくつも丸く紐でつなげて最後に網がある仕掛けを使って追い込む。食べ方はしょうゆや砂糖を付けて串焼きにして食べた。ツガニは煮て食べたが、ツガニ汁では食べていなかった。ハエは、後入川のもの小さく、物部川で捕ってきたハエを後入川の深い所に入れていた。大きくなったら竹で編んだ「ミノコシ」で捕まえる。食べ方は焼くまたはしょう油・砂糖で煮付け。モツゴは、木ノ板と竹を組み合わせた籠（入口があって中には仕掛けがある）を川に付けて捕った。餌は蚕がすんで茶色い繭になったもの（「ハチノス」）をカラカラにして粉にする。それを味噌と赤土とまぜて団子にして餌にした。味噌は川の水で団子が溶けないようにするためのつなぎ。食べ方は塩をして焼くか、煮るか。ガラスの瓶に団子を餌に獲る「ビンヅケ」もやっていた。

【中ノ谷】

寄合場 中後入で寄合をするといったら西ノ谷、東ノ谷から中ノ谷の横山家に集まって話し合いをした。横山家は中後入の寄合場になっていた。

水路 「ヒコ井」とその上に「中山井」がある。2つの水路沿いに2道があって、いずれも西ノ谷と中ノ谷をつなぐ道だった。忠霊塔の後ろに稲葉谷から取水する水路「シノベ井」があった。水路管理の田役では、赤土を取ってきて水路の補修をした。赤土は西ノ谷の東側の山（今は墓山）にあって取ってきていた。

一堂・東ノ谷への里道 一堂（一同）の人は有谷でなく、中ノ谷を通っていった。暗くなると提灯をかざして登って行っていた。中ノ谷から一堂まで

は歩いて約30分。その道は奴田までつながって西又まで行けた。奴田には草取りに行ったことがある。また、東ノ谷の人はお宮（須賀神社）後ろの道を通して中ノ谷に来た。

田 田んぼでは米の後は麦、ニホンバレ、サチワタリ、コガネニシキを作った。今はヒノヒカリ。いづれも中稲（なかく）の米。

牛・ヤギ 牛は赤牛。1頭メス牛を飼って、子供ができるとバクロウさんに売った。昔は工科大の所に種付け場があって種付けをしに行っていたが、後には種付けに来てくれるようになった。餌は田んぼや畑のあぜ草。風呂ガ谷の奥には草刈り場もあった。何軒かヤギを飼っている家もあった。近所の人にミルクを分けたりはしていた。

桑畑 桑畑のふちには、桐の木が何本も植えていて、ゲタやタンス作りに利用された。桑の木とクワの木の間には、カライモを植えた。カライモを切り干しにするのは11月頃だった。

タバコ・藍 本村で盛んだったタバコは中ノ谷では作っていなかった。藍は1軒作っていたが、集落の皆で作っているものではなかった。

ボサ・炭焼 浅木を切ったボサは、高知や南国へも出していた。集落の上の方は浅木で、炭焼をしている家もあった。1尺ぐらいに荒割りした炭を売っていた。ヨコムネの山にも炭窯があって、黒炭を背負って少しずつ出してきた。

文旦 戦後すぐくらいまで温州ミカンを作っていた。早生と晩生があって何十本も植えていた。11～12月が収穫期。60年前に横山家が初めて桑畑に文旦を植えた。苗は山北からもらってきた。収穫期は12月中頃～1月。中ノ谷の3、4軒が、昔は後免の市場に出していたが、その後香南市香我美町の山北へ出荷するようになった。今はやめた所が多く、今は出荷しているのは1軒だけ。50年生ぐらゐの木が多い。病気がつきやすいから消毒が必要、寒に弱く枯れてしまうこともある。日当たりが良く、山に囲まれているので風も弱い、赤土系の土で作るからか、「山北よりもおいしい」という声もある。

【東ノ谷】

水路 有谷川から取水する上の水路が「シバ井」、下の水路が「キド井」。

田畑 米の後は麦。子供の頃はアサヒという穂の長い米を作っていた、若い頃は農林22号、今はヒノヒカリを作っている。田んぼの岸では大豆。カジも一時は田んぼの岸で作っていた。皮剥ぎはせず、本村でカジを集めていた人が取りに来てくれた。畑はほとんどがカライモ。東ノ谷には山はほとんど

なく、田畑だった。

乳牛 2軒が乳牛を飼って、牛乳を出荷していた。道路（県道）までタンクに入れて持っていた。どこからか集めに来る人がいて、毎朝取りに来ていた。2軒でメス1匹ずつ買っていたが、1950年代にやめた。種付けは精液を買ってきて家でやっていた。

炭焼 東ノ谷の人ほとんどが炭焼をやっていた。山は赤津ヶ森の下、奴田の山よりさらに奥山に炭窯を作った。5貫（20キ）を3俵（60キ）、さすで突き刺して背負って徒歩で下ろしてくる。力あるもんは4俵もっていた。山から東ノ谷までは約1時間かかった。道の所まで出したら木馬で引いたりもした。炭を下ろしてくるのはだいたい夜。一堂を経由して佐竹まで降りる。佐竹には木馬道があった。県道まで出したら仲買人がいて買っていった。ボサは家用で出荷はしていない。

奴田 4町田んぼがあって5軒家があった。1反くらいの田んぼがぼつぼつあるという感じだったと思う。清水ヶ森から約2キの水路をひいていた。その水が有谷川にも落水している。一堂には昔家が10軒あった。

有谷川 モツゴ、ゴリ、カニ、ツガニが採れた。1950年代に大雨で地滑りが起きて、田んぼがいかった事があった。それが一番大きな水害。

木材搬送 50年前、集落には商売人が切った木を受けでワイヤーを使って出す仕事をする人もいた。20本をワイヤーでひいて山から下ろす。これが一番金になった。日用が500～700円。出していたのはスギ、ヒノキ（奴田の奥にはモミ、トガとか大きな木もあった）。木を運びに奴田へぎっちりいった。**製材所** 有谷には昔製材所があって、近くまで木を下ろしてきて製材した。製材した後は県道まで下ろして木材市場へ出していた。

イカダ輸送 戦前は、材木は物部川をイカダで運んでいた。神母ノ木まで行って、イカダを小さく組み替えて舟入川を下って高知城下まで持っていった。佐岡では、佐野「仁井田」の岸と佐竹の「キョトジ場」がイカダの組場所。キョトジ場では丸太をこかして、下の物部川へ落としてイカダを組んでいた。大字・白川では、清水ヶ森などから出してきた材木を、橋の手前の「ケタ」という場所に下ろしていた。

トラック輸送 イカダ輸送が終わり、車が出てくると、佐竹の人がトラック輸送の「車こく」をやっていた。大栃の方へ行って材木を運んだりしていた。

荷車による木材搬送 大後入からの材木搬出は、タイヤのついた荷車引きだった。道がこんまいの

で、荷車の運転が非常に難しかったらしい。下ろすのも大変だが、これを大後入まで上げていくのがまた大変だった。

6. おわりに

本稿では、戦国末期～昭和期の中後入村の歴史や人々の暮らしを、文献資料や聞き取り調査から復元してきた。史料的制約から不明な点も多いが、断片的ではあるが、中後入の村落の変遷が見えてきたのではないかと。

すなわち、西ノ谷、中ノ谷、東ノ谷の3集落の関係性は、戦国期以前に中後入村、大屋敷村、河内村、遅越村に分かれていた状況に起因し、中後入村とは西ノ谷のことを指す呼称であったことが分かった。江戸期には、長距離用水路の開削により新田開発を進めて大きく耕地面積を拡大し、家屋を増やした。4集落は中後入村として統合され、佐岡村庄屋一名本一組頭一五人組による村統治が行われた。

近現代においては、1970年代以降、人口減少や耕作放棄、植林化が進むまで、活発な土地利用が行われ、多彩な生業が行われていた。現在、ムラの発展を支えた水路や田畑・山林は機能しなくなり、村落景観は大きく変貌している。戸数は明治初期の30戸から現在11戸まで減少し、戦国末期の17戸を下回っている。

今後、中後入を里山再生のモデル地区としていく場合、山林を幅広く利用した江戸期や近代の姿を追い求めるのには限界がある。また、里山の景観は、植林などにより大きく変貌していることも考慮する必要がある。地域資源として再生するものや発展させるものを見出し、取捨選択する場合、本稿で提示した歴史資料やムラの歴史を材料にしていたら幸いである。

脚注

注1) 大字・佐野は仁井田と佐野の大字に分かれていたが、現在は佐野に統合されている。戦国・江戸期の村区分では仁井田・佐野を合わせて佐野村としている。

注2) 社会学者の大野晃氏は、高知県における山間集落の現状を調査し、「限界集落」の概念を提唱した(大野晃, “山村環境社会学序説”, 農山漁村文化協会, 2015)が、衰退する現代山村を分析対象としたため、それ以前に都市や農村の暮らしを支えた山村の豊かさを十分に示すには至っていない。

注3) 西ノ谷は、今西喜久氏(昭和6年生)、今西良貴氏(昭和7年生)、中ノ谷は横山愛氏(昭和13年生)、東ノ谷は黒岩隆清氏(昭和9年生)にお話しを伺った。

注4) “日本歴史地名体系 高知県の地名”は、『地検帳』の大屋敷名と河内名を大字・有谷の領域と推定する。しかし、有谷村、秋友村、一同村、中後入村の地名を比定していくと、現在の「中ノ谷」集落の領域が空白地となる。また、『地検帳』大屋敷村の「□□□コ」「西ノ□□」(表1)が、大字・有谷の一堂との境界部の小字「西ノサコ」の周辺と比定した場合、検地順でもその後検出される屋敷群が現在の「中ノ谷」集落として違和感がない。さらに、明治12年の『神社明細帳』の中後入村・山祇神社の項に「字ミフロヂ谷鎮座」「神社記云ホノキ大屋しき山神」とあり、一帯が「大屋敷」の地名であったことが確認できる。

注5) 大道直紀・国分将吾・嶋田裕典・渡辺菊眞, “香美市の中山間地域にある古民家周辺の山林の現況と変遷”, 高知工科大学紀要, 14巻1号, 2017の地図に中後入の水路が記載されているが、4つの水路全ては復元できておらず、今後調査が必要である。なお「中山井」「シバ井」は現在使われていないという。

注6) 水田での白米と赤米の収量比率は5:1となっている。

注7) 「槐葉屋敷」【史料13】「松葉」【史料8】「長ヲ竹」【史料12】の地名は小字や聞き取りで現地比定できていないため記載していない。「立葉道」【史料11】は「立葉谷」の周辺に比定した。

注8) 今西氏によると、旧暦8月15日に中後入(出身)の五百蔵姓が集まるお祭りがある。当屋(とうや)は現在5軒で持ち回り。東ノ谷の先祖の祠(五百蔵先祖八幡)の掃除、のぼりをかけてお祭りをした後、当屋の家でおきやくをした。今西家にあった帳面を見ると、祭りを始めたのは明治の頃。なお五百蔵の本家はもと有谷のサゴノイシにあった。

注9) 屋号の詳しい研究史や土佐の山村屋号の性格については、楠瀬慶太, “土佐山村の屋号研究試論”, 高知大文, 49号, 2018を参照。

注10) 大後入の屋号は梅野光興氏の収集を参照した。

注11) 西後入では屋号の聞き取り調査を行っていないため、まだ多数の屋号がある可能性がある。

注12) 一堂、奴田の屋号は聞き取りできていない。

文献

- 1) 高知工科大学の里山プロジェクトのホームページ (<http://chiikirenkei.org/satoyama>).
- 2) 高木方隆, 渡辺菊眞, 吉田晋, 大内雅博, 五艘隆志, “プロジェクトの進捗”, 高知工科大学紀要, 14 巻 1 号, 2017.
- 3) 渡辺菊眞, “香美市の過疎村落にある金峯神社の再建プロジェクト”, 高知工科大学紀要, 14 巻 1 号, 2017.
- 4) 村井亮介, 正岡水月, 高木方隆, “中山間地域の持続可能性評価”, 高知工科大学紀要, 12 巻 1 号, 2015.
- 5) 渡辺菊眞, “香美市の中山間地域にある古民家周辺の聖地・葬地の現況”, 高知工科大学紀要, 13 巻 1 号, 2016.
- 6) 大道直紀, “佐岡地区中後入・有谷の空間的特質”, 高知工科大学 2017 年度修士論文.
- 7) 大道直紀, 国分将吾, 嶋田裕典, 渡辺菊眞, “香美市の中山間地域にある古民家周辺の山林の現況と変遷”, 高知工科大学紀要, 14 巻 1 号. 2017.
- 8) 天羽朝陽, 若林寛和, 西内裕昌, “佐岡地区における里道ネットワーク解析”, 高知工科大学紀要, 15 巻 1 号, 2018.
- 9) 池内克徳, 藤原駿, 渡辺菊眞, 楠瀬慶太, “佐岡地区本村における歴史景観の調査”, 高知工科大学紀要, 15 巻 1 号, 2018.
- 10) 渡辺菊眞, 楠瀬慶太, 大西悠, 岡崎廉, 三島宏太, “佐岡地区中後入における空間的特質の一考察”, 高知工科大学紀要, 16 巻 1 号, 2019.
- 11) 奥四万十山の暮らし調査団編, “土佐の地名を歩く”, 地域資料叢書 17, 2018.
- 12) 石畑匡基, “土佐藩における開発と長宗我部地検帳”, 第 11 回四国地域史研究協議会大会報告, 2018.
- 13) 上村敬介, “幕末・明治の神社への寄進”, 会報香美史談, 38 号, 2018.

Survey on Historical Landscape of Nakagonyu-village in Saoka —Resident life Considered by Historical Analysis—

Keita Kusunose^{1*} Haruka Ohnishi² Ren Okazaki²

Kota Mishima² Kikuma Watanabe³

(Received: May 9th, 2019)

¹ Research Organization for Regional Alliances of Systems, Kochi University of Technology
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami City, Kochi 782–8502, JAPAN

² Infrastructure Systems Engineering Course, Kochi University of Technology
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami City, Kochi 782–8502, JAPAN

³ School of Systems Engineering, Kochi University of Technology
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami City, Kochi 782–8502, JAPAN

* E-mail: kusukei31@yahoo.co.jp

Abstract: This report aims to discover the attributes of the Historical Landscape of Nakagonyu village in Saoka. A combination of the method of reading and interpreting Historical Landscapes, and the methodology of Japanese history were used, as well as the reading of ancient documents and folklore, and interviews with elderly people. Through this historical analysis, we are clarifying the transition and life of the Nakagonyu village for each historical era, including the four settlements from the “Age of Warring States” (1467–1600) before they were integrated into Nakagonyu village in the Edo period (1603–1868). Through the excavation of long-distance waterways, the progression of the area of fields and the number of houses has been uncovered. In the early Meiji period (1868–1912), the village landscape was formed with wide use of the forest and fields, leading to the present day. However, since the 1970s, land cultivation abandonment, reforestation, and population decline have advanced, and it has reached the present level.